

## 夏の家、冬の家

アイヌ民族の食材はほぼ100%自然の恵みに頼っていたことはいろいろな場面で説明していますが、狩猟や漁労、植物採取のため



佐賀 彩美 (さが あやみ)

アイヌ語地名研究会

北海道出身。北海道大学法学部卒業。モンレー国際大学院(現ミドルベリー国際大学院モンレー校)通訳翻訳学科修士課程修了。全国通訳案内士。

化した生活をしてきたことがよくわかります。建物の材料も、最後には朽ちて自然に還る草木であり、自然に負荷をかけない完全な循環型社会

の地理的便宜に加えて厳しい冬を生き延びる必要もあり、人々は季節ごとに生業を営むため山に海に、川や湖にと、複数の家を持ち、各家を移動しながら暮らしていました。夏季の家はサッチセ(sak-夏のcise-家)(樺太ではサハチセ)、冬の家はリヤチセ(riya-越年のcise-家)(樺太ではマタチセ(mata-冬期間のcise-家))といい、夏の家は地上面に建てられていました。積丹の地名は、シャコタン(サッコタンsak-夏季のkotan-村)に由来し、サッチセ、つまり夏の家がまとまって建てられた集落であったのです。確かに積丹は、海の幸を得るためには絶好の環境です。また、鮭はアイヌの人々の主食ともいえるものなので、鮭が遡上する川が近くにあることも重要であり、それに付随して、漁小屋や捕獲した鮭を燻製にする燻製小屋も必要不可欠でした。

冬の家は、寒さを防ぎかつ雪に埋もれてしまわないよう、寒風があまりあたらない小高い場所が選ばれ、地面を1mほど掘り下げ、その土を周囲に積み上げ、凹地内に柱を建て、その上に屋根を組み、さらに保温のため屋上を土で覆うという建築方法です。竈もあり、上部には加湿できるよう水を入れた甕をすえ、焚き火の煙は、土穴を掘り、粘土製の煙筒から外に抜けるようになっていました。暖房のため竈の熾火を床の炉に移すということもしていました。夏、冬の家以外にも、猟のため山中に作るクチャと呼ばれる仮小屋は合掌式で拝み小屋といわれました。ほかにもコンブ漁や2月ごろ嵐の後に海岸に打ち上げられる海藻やアザラシの子をとるための浜辺の家など、いずれも構造は簡単なものですが、季節や用途に合わせて様々な小屋が使われていました。これらの小屋をみても、アイヌの人々は季節ごとの自然の恵みをフルに活用し、自然と一体

であったというわけです。

ところで、アイヌの人々の間では空き家には、オハチスイエ=オハチスイエヘ(oha-空いたci-家をsuye-揺らすh-もの)という化け物がいるとされてきました。夏冬の家には必ず家の守護神が祀られます。神様の数は地域によって異なり、沙流川地域では男神の1神、他の地域では夫婦の2神、白老のように1男2女の3神であるところもあります。家を長期間空ける場合は、その旨を守護神にことわって出かける必要がありますが、そのまま住人が戻らず長いこと顧みられないと、守護神は苛立って魔性のオハチスイエに心変わりし、それとは知らずに空き家に宿る人が敬意を払うのを怠ると怪我をさせられたり、時には命を奪われることがあるというのです。流刑によって樺太へやってきたポーランド人で、北海道および、樺太地方のアイヌ語音を話者から蠟管に録音して現在に伝えたブロニスワフ・ピウツスキの記録には、この空き家の化け物の話が収録されています。オハチスイエに襲われる場合はどんなふうかという、泊まった人の前に人間と同様の姿になって現れ、泊まった人の行為をそっくり真似ます。そのうち相手が化け物だということに気が付き、人間が持参していた矢を射かけると、オハチスイエは破れたハンカタ(hankata-樹皮容器)で叩き落とし、「アッハッハー、イッヒッヒー」と笑い、「ハンカタチョホチャハチンランケ(hankata-樹皮容器をcohca-射てもhacir-落ちranke-続ける)」と、射る矢が尽きると同時に人を襲い命を失うことになるということです。国内でも空き家が年々増え続けていますが、オハチスイエだけには会いたくないものです。

\*本稿は、アイヌ語地名研究会会長、藤村久和先生を講師として(一社)北海道開発技術センターが自主事業として実施しているアイヌ文化勉強会の内容を、藤村先生監修の下、筆者が取りまとめたものです。

藤村 久和 氏 北海学園大学名誉教授 北日本文化研究所代表 アイヌ語地名研究会会長  
アイヌ学全般(精神文化・口承文芸・衣食住・民族医療(整体ほか等))を研究領域とすると共に、アイヌの人々が自然を管理することなく、いかに共存してきたかについて、その思想や哲学を自ら学び・実践している。また、アイヌ民俗文化財調査(北海道教育委員会)に従事し、道内に居住する古老の伝承話の聞き取り作業を行い、その成果が例年報告書として刊行され、資料篇等も随時刊行している。近年は、食育コーディネーターとして北海道の食育計画にも参画する。主な著書:『アイヌの霊の世界』(小学館、1982年)、『アイヌ、神々と生きる人々』(福武書店、1985年)、『アイヌ学の夜明け』(梅原猛氏との共編、小学館、1990年)、『アイヌのごはん』(監修、デーリィマン社、2019年)、『平成20~令和4年度アイヌ民俗文化財調査報告書アイヌ民俗技術調査1~14』(北海道教育委員会、2008~2023年)等。